

障害当事者による他の障害者支援の有効性

—化粧指導プログラムを通して—

平野 志織

I. 問題と目的

障害者の「自己効力感」,「自己肯定感」を高める支援や研究が多くなされている。「自己効力感」を高めるために多く取り組まれていることは、「成功体験を積ませる」「称賛する」といったことであり、評価は第三者の観察によるものが多い。

発達障害児の「自己肯定感」の形成については、当事者の成功体験に対する他者からの前向きな評価が有効である(白石, 2007)。また、自分の全てを承認してくれる他者の存在が自己評価の向上に重要であることから、当事者を共感的に理解し、寄り添う態度で接する他者の存在が有効である(別府・坂本, 2005)と言われている。

高橋・有川(2014)は、支援ニーズのある成人女性への化粧プログラムの有効性について検討を行った。その結果、化粧スキルの向上が見られた。また、松井ら(1983)は、『化粧行為自体がもつ満足感』『対人的効用』『心の健康』といった3つの効用を化粧の効用としてあげている。これらの効用から、「自己効力感」や「自己肯定感」を高めるためのプログラムとして有効である可能性が示唆されている。

ところで、障害者の自立に向けた支援や指導の取り組みが多くなされている。しかし、障害当事者が他の障害者に支援をするという活動や研究は少なく、支援の有効性はあまり検討されていない。

以上のことから、本研究では、障害当事者による他の障害者への化粧プログラムの有効性と化粧指導スキルの形成、他の障害者への化粧指導により、自己効力感、自己肯定感の向上にどのような影響を及ぼすか検討する。

本研究

I. 目的

指導者の化粧指導スキルの習得と測定、介入前

後の主体的創造的な生活態度や個人の自己の社会に対する価値観を把握する。

II. 方法

1. 参加者

①化粧指導者

化粧指導者は、A氏(20歳女性)、B氏(25歳女性)の2名であった。

A氏はE会に所属していた。E会は、N県内の発達障害の子どもをもつ親の会であり、A氏は発達障害をもっている。現在、N県内の大学に在籍していた。昨年度開催された、化粧教室を受講して以来、出掛けるときや大学に行くときなどに化粧をしていた。人に何かを教えた経験はなかった。

B氏も同じくE会に所属していたが、約1年間E会の活動に参加していなかった。B氏も発達障害をもっている。現在、N県内の施設で仕事をしていた。時々化粧をすることはあるが、習慣化していなかった。人に何かを教えた経験はなかった。

②化粧教室受講者

受講者は、E会に所属しているC氏(14歳)、D氏(21歳)、E氏(16歳)の3名であった。

C氏は、N県内の中学校に在籍していた。中学校1年生時に知的に遅れのない自閉症と診断された。化粧経験は全くなかった。

D氏は、N県内の飲食店で働いていた。小学校6年生時にADHDの不注意型で環境に適応しているタイプと診断された。聴覚的情報の受け入れに困難性を示しており、一斉型の授業は苦手であった。化粧経験はあったが、習慣化していなかった。

E氏は、N県内の高等学校に在籍していた。E氏は発達障害をもっている。化粧経験はほとんどなく、普段も化粧はほとんどしていなかった。

2. 手続き

(1)化粧指導を行う参加者の化粧スキルの評価

化粧指導を行う参加者の化粧スキルを高橋・有川（2014）の「化粧スキル課題分析表」を使用して測定した。その結果A氏,B氏ともに90%以上の化粧スキルがあったことから,化粧スキルは維持していた。化粧指導ができる実力があることが確認された。

(2) 化粧テキストについて

参加者 A 氏, B 氏に「化粧テキスト」(高橋・有川,2014) を使用しての感想や意見を求めたところ、「文字はあまり読まない。」「ページ数を記載してほしい。」「イラストがもっとあるとわかりやすい。」「カラフルな方が楽しくなりそう。」という感想や意見が出された。これらを基に、「化粧テキスト」の構成及び内容について再検討を行った。主な改善箇所は、「説明文を減らし,イラストや写真を多く載せた。」「アイシャドウのチップの説明については,チップのイラストを載せ,チップの裏表の使い分けは色を変えて示した。」また、「ページ数を記載し,全ページカラー刷りにした。」などである。以下改訂したテキストを「改訂版化粧テキスト」とした。

(3) 化粧教室の内容について

20XX 年 10 月から 11 月までの間, 全 3 回の化粧教室を開催した。1 回の時間は 1~2 時間であった。化粧指導の手続きは,化粧指導行動のデータを取り, A 氏が C 氏と D 氏に,B 氏が E 氏に「改訂版 化粧テキスト」を見ながら個別指導の形態で行った。

(4) データ

1) 化粧指導を行う参加者の化粧指導行動の変容に関するデータ

化粧指導行動の変容の評価を行うために,「化粧指導スキル課題分析表」を用いて,化粧指導スキルの評価を行った。また,化粧指導教室初回の前と第 3 回化粧教室で「生き方尺度」(板津,1992)のアンケートを行った。「生き方尺度」とは,「主体的創造的な生活態度」や「自己の社会に対する価値観の変容」を把握するための尺度である。

2) 受講者の化粧行動の変容に関するデータ

化粧指導を行う参加者の化粧指導スキルの

到達度を測定するため,「化粧のパーツ課題分析」(高橋・有川,2014) をもとに筆者が作成した「化粧スキル課題分析表」を使用して測定した。

3.結果

(1) 化粧指導者の基本メイクの指導スキルの変容について

A 氏, B 氏ともに化粧指導スキルが上昇した。A 氏の化粧指導スキルの変容を Fig. 1, B 氏の化粧指導スキルの変容を Fig. 2 に示した。

(2) 化粧教室受講者の化粧スキルの変容について

C 氏, D 氏, E 氏ともに化粧スキルが上昇した。A 氏の指導を受けた C 氏の化粧スキルの変容を Fig. 3, A 氏の指導を受けた D 氏の化粧スキルの変容を Fig. 4, B 氏の指導を受けた E 氏の化粧スキルの変容を Fig. 5 に示した。

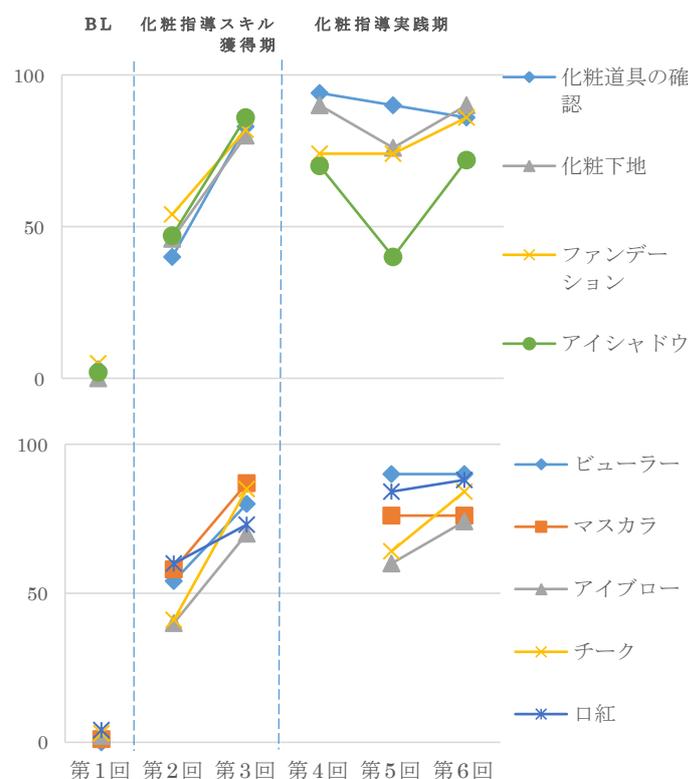


Fig. 1 A 氏の基本メイクの指導スキルの変容

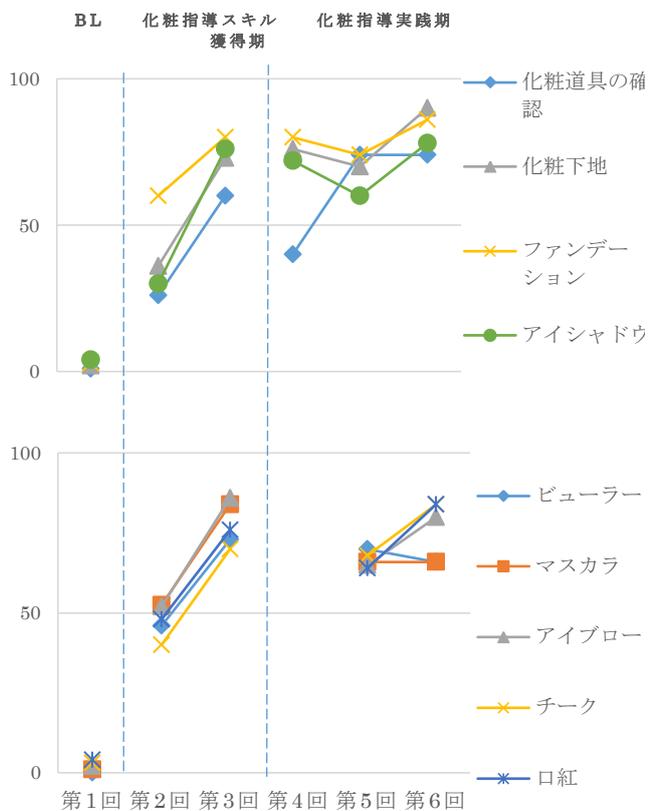


Fig. 2 B氏の基本メイクの指導スキルの変容

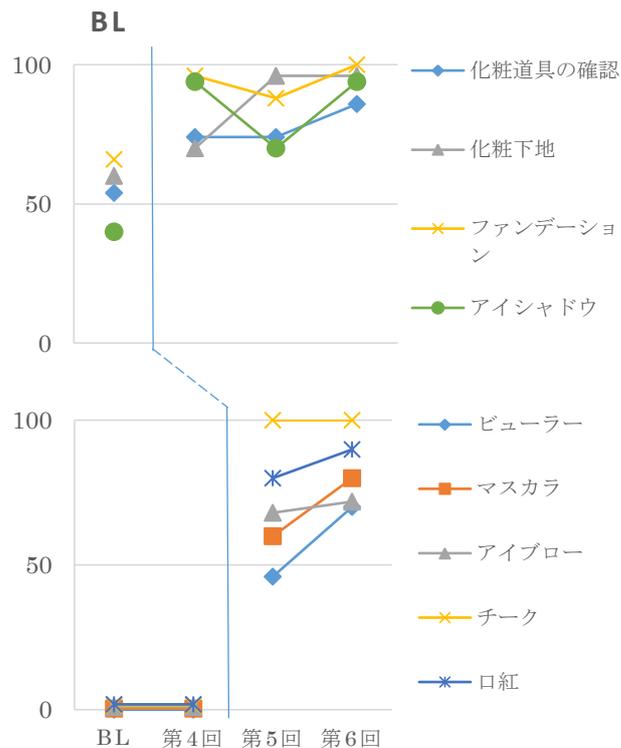


Fig. 4 A氏の指導を受けたD氏の化粧スキルの変容

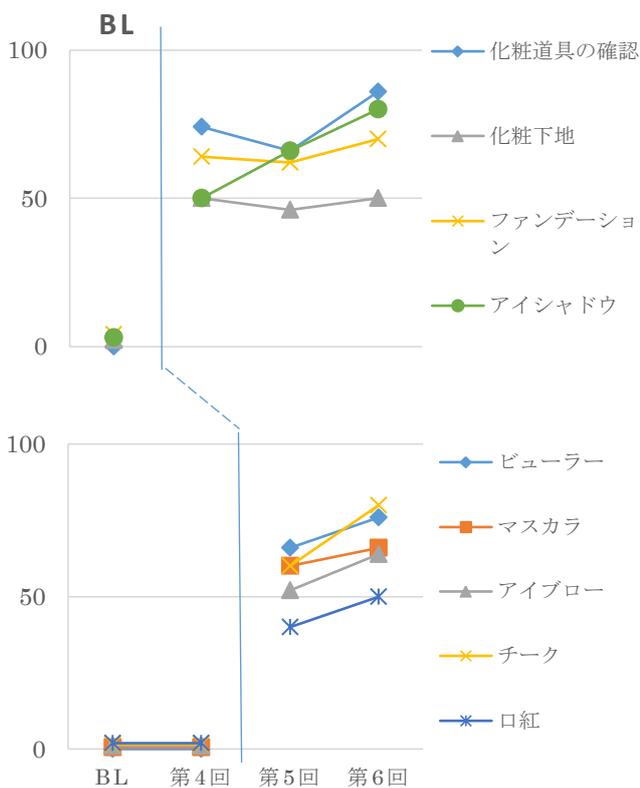


Fig. 3 A氏の指導を受けたC氏の化粧スキルの変容

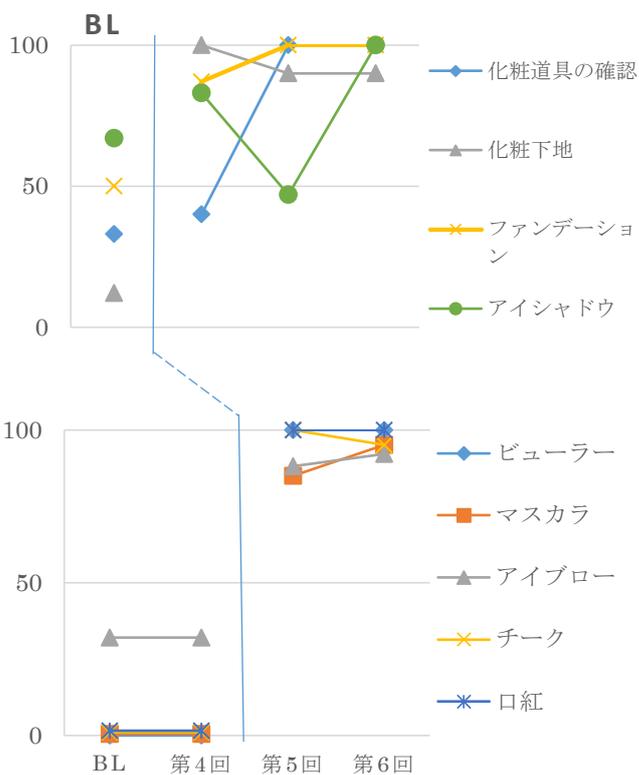


Fig. 5 B氏の指導を受けたE氏の化粧スキルの変容

(3) 「生き方尺度」の変容について

A氏とB氏の「生き方尺度」の変容について、A氏の変容を Fig. 6, B氏の変容を Fig. 7 に示した。

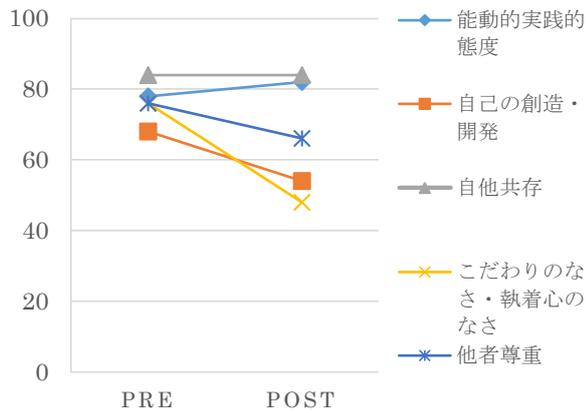


Fig. 6 A氏の「生き方尺度」の変容

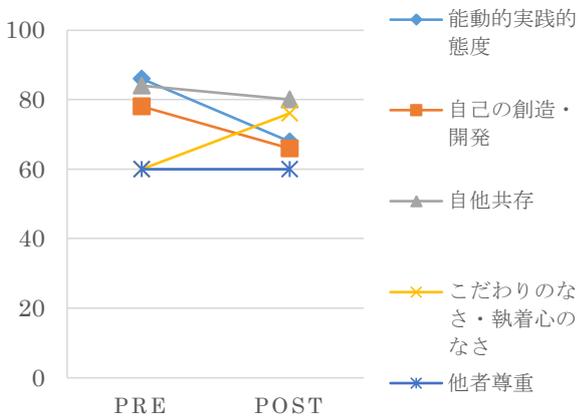


Fig. 7 B氏の「生き方尺度」の変容

III. 考察

1. A氏, B氏の化粧指導スキルの変容

A氏, B氏ともに, 化粧指導の際に化粧道具を用いて見本を示したり, 受講者に声を掛けたりする様子が見られ, 化粧指導スキルが上昇した。また, どの受講者も, 化粧スキルが上昇したことからA氏, B氏の化粧指導スキルが確かに上昇したことがわかる。

これらの結果の要因として1つ目は, 話し合いを通して自己の指導を振り返り, 反省を指導法にただちに反映したためであると考えられる。2つ目は, 化粧テキストや指導法の工夫や試行錯誤をしたことにあると考えられる。

2. 「生き方尺度」の変容

各項目でA氏は「能動的実践的態度」, B氏は「こだわりのなさ・執着心のなさ」でそれぞれ上昇したが, その他においては減少した。理由の1つ目は, 参加者が自信をもって化粧を教えることができる前に, 化粧教室が終わってしまったためである。2つ目は, A氏, B氏の指導を受けた受講者が, 外出の際に化粧をするようになったことなど見聞きしていなかったため, 化粧教室場面以外への般化の様子は確認できておらず, 自らの指導による成果を実感できなかったことにあるのではないかと考える。しかし, 化粧の指導を行っている最中にA氏は大事だと思ったことを「化粧テキスト」に書き込み, 話し合いでは積極的に意見や考えを述べていた。また, B氏も「一重験用の化粧の仕方」を雑誌で調べてくるなど能動的に化粧指導にかかわる姿が見られた。こうした行動上の変容が見られたにもかかわらず, 尺度上は自己効力感, 自己肯定感の向上が見られていない。これらの能動的な行動は, 自己評価を維持するための防衛行動(セルフハンディキャッピング)であるのではなかろうか。

IV. 文献

高橋美穂・有川宏幸(2014) 支援ニーズのある成人女性への化粧指導プログラムの有効性について. 日本LD学会第23回大会<プログラム・発表論文集>p65

白石雅一(2007) 障害をもつ子の自尊感情を考える. 児童心理, 61(10) pp.974-978.

別府哲, 坂本洋子(2005) 登校しぶりを示した軽度知的障害児における自己の発達と他者の役割. 心理科学, 25(2) pp.11-22.

板津裕己(1992) 生き方の研究—尺度構成と自己態度との関わりについて「カウンセリング研究」25.85-93

松井豊・山本真理子・岩男寿美子(1983) 化粧の心理的効用マーケティングリサーチ 21. 30-41